

開催趣旨

メディアアートの世界的祭典「アルスエレクトロニカ」(オーストリア・リンツ市)の30周年を記念して、日本のアート&テクノロジー、メディア芸術領域の特集展を開催します。

1979年の創始以来、同フェスティバルは、富田勲、坂本龍一・岩井俊雄や明和電機ら多数の受賞・参加によって日本と深い絆で結ばれています。本展は、フェスティバルへの参加作品群を中心に、芸術／科学・テクノロジー／社会を結ぶ新たな可能性を探ります。

本展では、アルスエレクトロニカ・リンツ後援のもと、30年の歴史を物語る貴重な映像や作品資料が初めて展示されます。約25プロジェクト・50作品による展示は複数のパートで構成されています。歴代受賞者らによる展示や、本年度受賞作品のほか、アルスエレクトロニカ・センターとの企画連携(デバイスアート展)、リアルタイムでリンツと東京会場を結び、Museum of the Future(未来の美術館)を考え、解体再構築するネット・プロジェクトも試みられます。さらに、文学作品の視覚化、デジタルパブリックアート、宇宙芸術などのハイブリッドな新領域を題材に、話題のメディア芸術／メディアアートが呈示されます。

本展は同時期開催の文化庁メディア芸術祭(国立新美術館)の協賛事業として、NTTインターコミュニケーション・センター[ICC]など国内関連施設と企画連携して展開されます。同時期開催のMOTコレクション展内「実験工房」展示や「バガボンド」作者・井上雄彦による大壁画「エントランス・スペース・プロジェクト」と併せて、メディア芸術領域の現在形や先駆者たちの姿を探ります。参加体験型の作品群、イベントや上映作品を通して、本展は「日本の表現力」とは何かを再考し、次世代に向けて考える貴重な機会となるでしょう。

アルスエレクトロニカとは？

1979年にドナウ河畔のオーストリア・リンツ市で創始された、世界最大の電子芸術フェスティバルです。2009年で30周年を迎え、アルスエレクトロニカ・センター（美術館）／フェスティバル／グランプリ／フューチャーラボという4つの柱を通じて、デジタルアートとメディアカルチャーの国際的拠点を形成しています。フェスティバルは「Code」「Simplicity」「New Cultural Economy」などユニークなテーマのもとに毎年9月に開催され、下記の8部門を持つアルスエレクトロニカ・グランプリの受賞作品展（Cyber Arts）／授賞式（GALA）、大規模なドナウコンサート（Klangwerke）、学校展（CAMPUS）など100を超える多彩なイベントによって約5日間に毎年10万人以上を集めています。リンツ市の欧州文化都市（Linz09）指定にあわせて、2009年1月に常設施設であるアルスエレクトロニカ・センターが新装開館しました。研究開発機関としてフューチャーラボを擁しながら、アートとテクノロジーが社会（都市）を変えたサクセスモデルとして、多数の新しい才能を世界に送り出しています。

[グランプリ8部門]

コンピュータアニメーション・Film・VFX … 商業作品も含めたアニメーション作品

インタラクティブアート … 双方向性を持つ、参加体験型の作品

デジタルミュージック … 電子音楽、またはビジュアル要素も含めたサウンド作品

ハイブリッドアート … バイオテクノロジーなど、学際的に新領域を探究する作品

デジタルコミュニティ … ネット上に展開されるグローバル／ローカルなプロジェクト

u19 — フリースタイルコンピューティング … オーストリア国内の19歳以下による作品

ネクスト・アイデア … 若手アーティスト／研究者による新作プロジェクト助成

メディアアトリサーチ・アワード … メディアアートの各領域を対象とした研究・論文表彰

*グランプリでは毎年12月から翌年3月まで作品募集を行います。世界各国のスペシャリストからなる審査員チームが各カテゴリーの受賞作品を4月に選出し、5月に発表が行われます。

フェスティバル期間中の主なイベント

9月のフェスティバル開催中、楽聖ブルックナーを記念したブルックナーハウス音楽堂でガラ（授賞式）が行われ、ゴールドデン・ニカ（最優秀賞）、優秀賞、入選の授与が行われます。最優秀賞・優秀賞の受賞者は、会期中に開催されるプリ・アルスエレクトロニカ・フォーラムでプレゼンテーションを行います。また、主要なイベントとして受賞作品展「サイバーアーツ」がOKセンター（上オーストリア州立現代美術センター）で行われます。アルスエレクトロニカ・センターでは、オーストリア国内の青少年部門「u 19-フリースタイルコンピューティング」作品が展示されます。「コンピュータアニメーション／Film／VFX」カテゴリー受賞作品は、特設エレクトロニックシアターで上映されます。「デジタルミュージック」の受賞者は、毎夜開催されるクラブイベントやコンサートでサウンド作品を披露します。学校展「CAMPUS」では、日本からIAMAS（2004）、東京大学（2008）が参加して好評を得ました。

アルスエレクトロニカ公式HP（日本語／英語）

http://www.aec.at/about_about_jp.php／http://www.aec.at/about_about_en.php

「サイバーアーツジャパン アルスエレクトロニカの30年」展の見どころ

メディアアート／メディア芸術とは何か？

本展は、話題の「メディアアート／メディア芸術」について知る／考える機会を提供します。

メディアアートとは、主に複製芸術時代以降のメディア（コンピュータやエレクトロニクス機器など）を用いた、参加体験型を特徴の一つとするアート表現です。日本のメディアアートは、1950年代の前衛芸術グループを先駆者として、80～90年代に活況を見せました。文化振興基本法（2001）でのメディア芸術の振興、小中高校の「映像メディア教育」スタート（2002）を経て、「日本の表現力」展（2007・文化庁メディア芸術祭10周年記念・国立新美術館開館記念展）以降も、マンガやアニメーション、ゲーム、映画等とつながる「メディア芸術」としても位置づけられ、若手作家支援のスタートや来たるべき拠点の形成に向けて、ますます注目を集めています。

初期の貴重な資料映像－日本初のアルス特集展

本展は、日本で初めて、世界最大規模のメディアアートフェスティバルとして広く知られるアルスエレクトロニカの歴史と現在について、日本との関わりを中心に紹介する特集展になります。

この領域において、早期から、いかに国際社会に向けてすぐれた作品が日本から発信されてきたか、過去30年にわたり、その卓越したイマジネーションの記録を見ることができます。

歴代受賞作品群の紹介

グランプリの8部門のうち、オーストリア国内対象の「u19」と論文賞「メディアアトリサーチ・アワード」を除く各部門（コンピュータアニメーション・Film・VFX／インタラクティブアート／デジタルミュージック／ハイブリッドアート／デジタルコミュニケーション／ネクスト・アイデア）の歴代受賞者による受賞作・近作・新作を展示します。楽しい参加体験型作品、静謐な美しさ、作品に込められた社会的メッセージや多様性の表現を体験することができます。

日本の表現力をあらわすインスタレーション

ヨーロッパのミラノサローネ、アメリカのACM SIGGRAPH（シーグラフ・全米電算機学会）でも評価され、かつて「小さな対象に魂やわざを込める」と評された「日本の表現力」とは？ センター美術館と同時開催中の「デバイスアート」プロジェクト（参加：岩田洋夫／八谷和彦／明和電機／クワクポリョウタ／児玉幸子／稲見昌彦）展示や、今年を受賞作品を通してその姿を考えます。

新しい領域の提案

国際的に評価されるメディアアート／メディア芸術領域の次世代をになう、新しい可能性を提案します。科学や純文学など異分野とのハイブリッド化、私たちの日常となっていく宇宙や無重力環境に展開される日本独自の「宇宙芸術」領域などにスポットをあて、デジタル表現をパブリックアートとして展開する試みを含め、過去の再考とともに次なるインスピレーションを探ります。

多様な連携企画・イベント

本展は、第13回文化庁メディア芸術祭（2月3日-14日・国立新美術館）やICCメタパス・プロジェクト（2月28日まで・予定）と連携し、アルス芸術監督ゲルフリート・シュトッカー氏の講演、明和電機／八谷和彦ら参加作家によるロボットやデバイスのシンポジウム、上映等を予定しています。

主な出品作家

h.o + 株式会社電通

クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー

河口洋一郎

岩井俊雄

鈴木康広／東京大学「デジタルパブリックアートを創出する技術」プロジェクト

岩田洋夫

明和電機

八谷和彦

クワクボリョウタ

稲見昌彦

児玉幸子

平野啓一郎＋中西泰人＋森野和馬＋ケンイシイ

池田亮司

真鍋大度

tEnt (田中浩也＋久原真人)

エキソニモ

スズキユウリ

野口靖＋安藤英由樹

渡邊淳司＋田畑哲稔＋安藤英由樹

渡邊英徳

国立天文台4D2Uプロジェクト

JAXA宇宙ステーション (ISS) / 「きぼう」文化・人文社会科学利用パイロットミッション

ほかPrix Ars Electronica＋[the next idea] 受賞者作品

【資料・映像など】

トロフィー (ゴールデン・ニカ像) ほかグランプリ資料

グランプリ受賞作家アーカイブ・グラフィック (協力＝ルートヴィヒ・ボルツマン研究所)

富田勲「ドナウコンサート・マインド・オブ・ユニバース」記録映像

アルスエレクトロニカ・ガラ (授賞式) 日本人受賞アーティスト贈賞・パフォーマンス映像 (河口洋一郎、藤幡正樹、坂

本龍一＋岩井俊雄、八谷和彦、明和電機・ほかの授賞式風景)

アルスエレクトロニカ新美術館プロジェクト (定点観測)

サイバーアーツ2008 (受賞作品展) バナー (石井陽子＋穂村弘『『火よ、さわれるの』』)

「Take Over」(企画展・2001年) バナー (イラストレーション：金子ナンペイ)

ほか

作家解説

凡例：〈 〉内はアルスエレクトロニカの参加部門・展示名。サイトアドレスは作家ホームページまたは参考URL

h.o + 株式会社電通 〈企画展2009〉

<http://www.howeb.org/j/works/cap.html>

h.o (関子泰三／小川秀明／佐藤水哉／玉川雄一／小川絵美子／由良淳一) + 株式会社電通 (大岩直人／寺本誠／佐々木康晴／稲菅翼) によるユニット。従来型広告の枠組を、ネット社会における新しい広告として解体・再構築する。「SLOGAN GENERATOR」では「スローガンをみんなに解放し、人をメディアにする」を目的に、アルスエレクトロニカ／東京都現代美術館を商品と捉え、それぞれの美術館に興味・関心を持ってネット検索してくる人々の「検索ワード」から、各美術館を言い表すスローガンを大量に自動生成する。そのスローガンを来館者に提示し、それぞれが気に入ったスローガン (缶バッジ等) を「お持ち帰り」して身につけてもらう。人そのものが自分の意志で広告メディアとなり、多様性を持つ新しい広告が展開していく実験が行われる。

クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー 〈インタラクティブアート〉

<http://www.interface.ufg.ac.at/christa-laurent/>

日ドナウ年を記念して、オーストリアから海外作家として参加。ATR人間情報通信研究所 (京都) 招待研究員、岐阜県立国際情報科学芸術アカデミー教授を経て、アルスエレクトロニカ会場でもあるリンツ工科大学造形芸術大学メディア学部教授を務める。植物学・芸術を専攻したソムラーと、メディア・ビデオを専攻したミニョノーは、1992年から「生命システムとしてのアート」をテーマに人工生命、コミュニケーション、人工現実感の領域で制作している。東京都写真美術館、NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、ハウス・オブ・シセイドウなどの国際的な活動、収蔵・受賞多数。代表作に《Interactive Plants Growing》(1992)、《A-Volve》(1994)、《Trans Plant》(1995)、《ライフ・スペイシーズ》(1997) などがある。

河口洋一郎 〈コンピュータグラフィックス／コンピュータアニメーション〉

<http://www.iii.u-tokyo.ac.jp/~yoichiro/>

1952年鹿児島県種子島生まれ。1992年より筑波大学芸術学系助教授、1998年より東京大学大学院工学系研究科・人工物工学センター教授、2000年より東京大学大学院情報学環教授。1975年からCG (コンピュータグラフィックス) に着手し、世界的CGアーティストとして活躍する。1982年国際学会SIGGRAPHで独自の造形理論「グロースマデル」を発表し、一躍世界の注目を浴び、国内外で受賞・展示多数。日本人として初めてアルスエレクトロニカに入賞。第100回ベネチアビエンナーレ日本代表芸術家に選ばれるなど、国際的な活躍のかたわら、反応する情感コミュニケーション「ジェモーション」など、ロボットや複合現実感研究も進める。先端科学技術と伝統芸能を結ぶパフォーマンスや、ロックギタリスト布袋寅泰の東大寺コンサート映像などを手がける。

岩井俊雄 〈インタラクティブアート〉

<http://iwaisanchi.exblog.jp/>

<http://tenorion.exblog.jp/>

1962年生まれ。メディアアーティスト。1985年、筑波大学芸術専門学校在学中に第17回現代日本美術展大賞を最年少で受賞後、国内外で多数の作品を発表・受賞し、注目を集める。アルスエレクトロニカでは、坂本龍一との伝説的なライブ「Music Play Images×Images Play Music」(本展で記録映像を上映) で知られる。TV番組「ウゴウゴルーガ」、三鷹の森ジブリ美術館の《トロロびよんぴよん》や、ニンテンドーDS「エレクトロプランクトン」、ヤマハと

共同開発した音と光を奏でる楽器「TENORI - ON」を手がける。現在では、NHK教育の幼児番組「いないいないばあっ!」のオープニング映像や、三鷹市立第五小学校での「光のえんぴつ、時間のねんど」など、ふたりの娘の父親として、書籍やブログを通じて親子の創造的な関係を精力的に発信している。

鈴木康広／東京大学「デジタルパブリックアートを創出する技術」プロジェクト 〈同上〉

<http://www.digital-public-art.org/airharbor/airharbor.php>

鈴木康広

1979年静岡県浜松市生まれ。2001年東京造形大学デザイン学科卒業。公園の回転遊具「グローブジャングル」を利用したインスタレーション「遊具の透視法」(2001)の発表をきっかけに、国内外の多数の展覧会やアートフェスティバルに参加。同作でアルスエレクトロニカ2002において入賞展示。デザインの展覧会やイベントにも積極的に参加している。<http://www.mabataki.com/>

東京大学「デジタルパブリックアートを創出する技術」プロジェクト・空気の港

パブリックアートの魅力である造形的な美しさや空間や自然との調和、場所性に配慮した空間演出と、メディアアートの特長である映像や音声を効果的に用いた動的なコミュニケーションや、インタラクティブ性、リアルタイム性を結んだ新しいアートのジャンルとして「デジタルパブリックアート」を提案する。(2009年10月9日-11月3日羽田空港第1第2ターミナルにて展示)

*科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業(CREST)「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」研究領域(平成16年-21年)によって実施されています。

デバイスアート・プロジェクト(参加者：安藤英由樹／稲見昌彦／岩田洋夫／草原真知子／クワクボリョウタ／児玉幸子／土佐信道／八谷和彦／前田太郎／矢野博明)

<http://www.deviceart.org/>

メカトロ技術や素材技術を駆使して、テクノロジーの本質を見せていく新しい芸術様式。アートとデザインとエンタテイメントの新たな融合を意味し、従来の芸術のパラダイムとは異なった視点を提供していく。人が相互作用をするデバイスそのものが、表現内容になる。茶道、華道などの伝統文化も、デバイスアートのルーツと見ることができる。今回は、安藤、稲見、岩田、クワクボ、児玉、土佐、八谷が参加する。

*デバイスアートは、(独)科学技術振興機構の戦略的創造科学推進事業(CREST)「デバイスアートにおける表現系科学技術の創成」(代表者：岩田洋夫)において推進されています。

http://www.jst.go.jp/kisoken/crest/report/heisei18/pdf/pdf11/11_1/005.pdf

岩田洋夫〈インタラクティブアート〉

<http://intron.kz.tsukuba.ac.jp/>

筑波大学大学院システム情報工学研究科教授。(独)科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業(CREST)「デバイスアートにおける表現系科学技術の創成」研究代表者。バーチャル・リアリティの研究に従事しており、とくに力覚フィードバック技術の実現とその情報メディアとしての活用に焦点を絞っている。フォース・ディスプレイと呼ばれる、バーチャルな物体の硬さや重さを表現する機械装置や、ロコモーション・インターフェイスと呼ばれる、VR空間における足の歩行感覚を合成する装置を作り、SIGGRAPHで発表多数。アルスエレクトロニカでは96-01年にかけて参加・入賞。「センスウェア」展参加でデザイン領域でも活動する。

明和電機〈インタラクティブアート〉

<http://www.maywadenki.com/>

明和電機／土佐信道

1967年兵庫県生まれ。筑波大学大学院芸術研究科卒業後の1993年、兄・正道とともに明和電機結成。代表取締役副社長就任。2001年、前社長・正道の定年退職にともない代表取締役社長就任。青い作業服を着用し作品を「製品」、ライブを「製品デモンストレーション」と呼び、日本の高度経済成長を支えた中小企業のスタイルで活動する。魚をモチーフにしたナンセンスマシーン「魚器」シリーズ、オリジナル楽器「ツクバ」シリーズ（アルス2003で受賞）やおとぎ話から発想される作品群「エーデルワイス」シリーズを制作し、展覧会やライブパフォーマンス、CDやビデオの制作、本の執筆、作品をおもちゃや電気製品に替えて大量流通させるなど、たえず新しい方法論を模索している。

八谷和彦〈ドットネット・現デジタルコミュニティ〉

http://www.petworks.co.jp/~hachiya/hachiya_kazuhiko/Information.html

1966年佐賀県生まれ。メディアアーティスト。九州芸術工科大学（現九州大学芸術工学部）画像設計学科卒業。個人TV放送局ユニット「SMTV」、コンサルティング会社勤務を経て現在に至る。作品には《視聴覚交換マシン》や《見ることは信じること》などの特殊コミュニケーション・ツール・シリーズ、ジェット・エンジン付きスケート・ボード《エアボード》やパーソナルフライトシステム《オープンスカイ》など機能をもった装置が多い。メールソフト《ポストペット》（アルスエレクトロニカ受賞作）の開発者でもあり、ポストペット関連のソフトウェア開発とディレクションを行なう会社「ペットワークス」の代表でもある。

クワクポリョウタ〈インタラクティブアート〉

<http://www.vector-scan.com/>

1971年生まれ。筑波大学大学院修士課程デザイン研究科修了／国際情報科学アカデミー [IAMAS] アート・アンド・ラボ卒業。1998年から主にエレクトロニクスを用いたデバイス作品の制作を開始する。ガジェットの体裁をとって遊べる作品を心がけつつ、デジタルとアナログ、人間と機械、情報の送り手と受け手など、さまざまな境界線上で生じる現象をクローズアップする。作品制作の他、メーカーとの共同開発なども手がける。SIGGRAPH、アルスエレクトロニカ、文化庁メディア芸術祭など国内外の活動・受賞も多く、日本科学未来館での個展「微笑みトランジスタ」では《ニコダマ》《シ|フ|イン》などで好評を得た。www.vector-scan.com/

稲見昌彦〈アルスエレクトロニカ・センター展示〉

<http://inami-lab.kmd.keio.ac.jp/>

慶應義塾大学大学院メディアデザイン研究科教授。科学技術振興機構 ERATO 五十嵐デザインインタフェースプロジェクトのグループリーダーを務める。東京大学リサーチ・アソシエイト、同大学助手、電気通信大学講師、同大学助教授、マサチューセッツ工科大学コンピュータ科学・人工知能研究所客員科学者、電気通信大学知能機械工学科教授を経て、現在に至る。「攻殻機動隊」の光学迷彩を思わせる、透明人間を工学的に実現させた「透明マント」や、アルスエレクトロニカ・センターでも展示された吸い込む感覚を体感できる「体感ストロー」など、ユニークな研究成果を展開する。

児玉幸子〈アルスエレクトロニカ・センター展示〉

<http://www.kodama.hc.uec.ac.jp/index-j.html>

1970年11月鹿児島生まれ。筑波大学大学院博士課程芸術学研究科修了、芸術学博士。電気通信大学人間コミュニケーション学科准教授、メディアアーティスト。竹野美奈子との共作「突き出す、流れる」で、第5回文化庁メディア

ア芸術祭インタラクティブ部門大賞受賞。SIGGRAPH2001での発表以降、磁性流体アート作品を次々と制作し、海外でも活発に発表を行って話題を集め、白い部屋のインスタレーション「脈動する」、磁性流体をウニに見立てた「波と海胆」、「モルフォタワー」シリーズなど、インタラクティブ・インスタレーションと映像による独創的な作品世界を展開している。文化庁メディア芸術祭10周年企画展「日本の表現力」(国立新美術館)、「Machines and Souls」展(ソフィア王妃芸術センター、スペイン)など国内外で発表多数。

平野啓一郎+中西泰人+森野和馬+ケンイシイ(森野=コンピュータアニメーション)

平野啓一郎

<http://www.k-hirano.com>

1975年愛知県生まれ。京都大学法学部卒。1999年在学中に文芸誌「新潮」に投稿した『日蝕』により第120回芥川賞を受賞。数々の作品を発表、各国語に翻訳される。近著・長篇小説『ドーン』(講談社)では、宇宙時代の人間性、アイデンティティや愛をとりあげ、メディアテクノロジーにも造詣が深く、短篇《バベルのコンピュータ》ではアルスエレクトロニカを登場させた。中西泰人と《記憶の告白》(「文学の触覚」展・東京都写真美術館)を手がける。

中西泰人

<http://www.naka.sfc.keio.ac.jp>

1970年大阪生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。慶應義塾大学環境情報学部准教授。感性情報処理、実世界指向インターフェイス、モバイルアプリケーションの研究に従事し、研究の一環としてメディアアート作品の制作や空間デザインを行なう。画像処理による手指認識システム《Narrative Hand》、GPSカメラケータイを用いた《時空間ポエマー》など。本展では、平野作品『ドーン』の象徴的シーンを出現させるインスタレーションを手がける。

森野和馬

<http://www.stripe.co.jp/home.html>

1966年生まれ。CGアーティスト。世界最高峰のCG学会SIGGRAPHで10年間連続入賞を果たすほか、アルスエレクトロニカ準グランプリをはじめ海外での発表・受賞多数。モーショキャプチャーを用いたKEN ISHII「Awakening」、井上陽水「花の首飾り」などPVや印象的なCM作品も多数手がける。本展では、平野作品『ドーン』の立体視による映像化に挑戦する。

ケンイシイ

<http://www.kenishii.com/>

DJアーティスト。学生時代にヨーロッパでデビューを飾り、テクノチャート1位を獲得。世界に発信する音作りのできるパイオニア的存在として、アーティスト・プロデューサー、リミックス、映画音楽、CM音楽、DJ、ファッションブランド設立など幅広い活動を展開する。愛知万博瀬戸日本館で森野とコラボレーションを行った。本展では、上記作品空間のサウンドを手がける。

池田亮司(デジタルミュージック)

<http://www.ryojiikedada.com/>

1966年生まれ。パリ在住。電子音楽作曲家/アーティスト。1990年より音楽活動を開始。1995年以降、コンサートやインスタレーション、レコーディングを通してサウンドアート領域において多角的な活動を展開。アルバム「+/-」(1996年)、「0℃」(1998年)や「Matrix」(2000年)は、批評家から最も過激で革新的な現代電子音楽として称賛されている。また、カーステン・ニコライとのコラボレーション・プロジェクトである「Cyclo.」、振付家ウィリアム・フォーサイス(フランクフルトバレエ団)、現代美術家の杉本博司、建築家の伊藤豊雄、アーティスト集団ダムタイプとのコラボレーションなど多方面にわたる活動も行っている。2001年アルスエレクトロニカにおいてデジタルミュージック部門のゴールデン・ニカ賞を受賞。

真鍋大度〈デジタルミュージック〉

<http://www.daito.ws/>

1976年生まれ。東京理科大学理学部数学科卒業後、プログラマー／システムエンジニアに加え、ターンテーブルリストとしても活動を展開。国際情報科学芸術アカデミー (IAMAS) DSPコース卒業後、振動・超低周波を使用した作品制作を行い、国内外で多くのアートプロジェクトに参加している。2004年、ウェブからインタラクティブ・デザインまで幅広いメディアをカバーするプロダクション「ライゾマティクス (rhizomatiks)」の取締役役に就任。2009年1月に行われたアルスエレクトロニカ・センター (美術館) のオープニングイベントでは、開館後初のパフォーマンスを担当したほか、センターのLED壁面全体を用いて、ザッカリー・リバーマン率いるYesYesNoとのコラボレーション作品を発表した。本展では、自分自身の顔を用いて展開されるパフォーマンスとその記録が紹介される。

tEnt (田中浩也+久原真人)〈ハイブリッドアート〉

<http://tent-info.com/>

田中浩也 (1975年生まれ。空間情報科学・空間認知科学) と久原真人 (1976年生まれ。デザイン・造形開発) によって2004年に結成されたデザインエンジニアリング・ユニット。自然環境で起こる現象を変換し、新しい風景を表現することをテーマに、試行錯誤を繰り返しながら、設置された土地の気候条件に反応して変化する環境デバイスを制作する。つららや吹雪・波を観測対象とした作品を、北海道・真駒内公園やモエレ沼公園などで展示。《Call ⇄ Response》では、鳥の発声器官を物理モデリングしたソフトウェアで生成された音声が、スピーカーとマイクを備えた装置から出力される。それに対して自然界の鳥から応答があれば、進化的発声アルゴリズムによって、鳴き方が洗練・変化・成長していく。

エキソノモ〈デジタルコミュニティ〉

<http://exonemo.com/>

千房けん輔と赤岩やえによるアート・ハック・ユニット。1996年より、ウェブ上でしか体験できない実験的プロジェクトで注目を集める。持ち前の機知にあふれたハッキング精神によって、インスタレーション、ソフトウェア、デバイス、ライブパフォーマンス、イベント・プロデュースへと拡張する。国内外の展覧会やフェスティバルに参加・受賞多数。アルスエレクトロニカではネットヴィジョン部門で「MobLab：日独メディア・キャンプ2005」で展開された《The Road Movie》がゴールデン・ニカを受賞。本展では、NTTインターコミュニケーション・センター [ICC] との連携による新作《ゴットは、存在する。》(「祈り」「化身」「噂」) を展示。東京都現代美術館にも「ゴット」を降臨させる。

スズキユウリ〈インタラクティブアート〉

<http://www.yurisuzuki.com/>

1980年生まれ。明和電機のアシスタントを経て、英国王立芸術大学 (RCA) のデザイン・プロダクト学科卒業。ダレル・ビショップに師事し、音と音楽が人に与える影響のデザインを探る。現在、ロンドンを拠点にフリーランス・デザイナーとして、イベントのコンテンツ・デザイン、ワークショップ・デザインを行なう。電子楽器「テルミン」奏者としても活動。サウンドアーティストとして、海外レーベルから音源を発表する。本展では、インタラクティブアート部門のみならずデジタルミュージック部門でもノミネートされた、アナログレコードによる可憐な造形の連作インスタレーション「Physical Value of Sound」を展示。

野口靖+安藤英由樹〈インタラクティブアート〉

http://r-dimension.xsrv.jp/jpn/watch_siggraph/

野口靖 (東京工芸大学芸術学部メディアアート表現学科講師) と安藤英由樹 (大阪大学情報科学研究科バイオ情報工学専攻准教授) に

よる共作。野口はメディアアート領域で教鞭を執る傍ら、3Dグラフィックスを利用した「時空間」マッピングシステムとネットワーク上のデータベースを連携させるシステムに取り組んでいる。安藤は、錯覚を利用したインターフェイスの研究と制作に携わり、工学系研究者として国際学会で広く研究発表を続ける一方で、新旧のアルスエレクトロニカ・センター展示に参加、渡邊淳司、草地映介との共作「Touch the Invisible」で第12回文化庁メディア芸術祭アート部門優秀賞を受賞など、アート領域での活動も意欲的に展開している。「Watch Me!」は、ロボット内蔵のぬいぐるみによる非日常的な動きのイベントを国内外（インド、NY、渋谷、巣鴨など）の公共空間に介入させ、人々の「視線」の振る舞いを撮影・記録し、その場固有の社会的拘束を可視化させる実験的なプロジェクトである。本展では、アルス2009での受賞にあわせてリンツで撮影したリンツバージョンも加えて公開される。

渡邊淳司+田畑哲稔+安藤英由樹〈ネクスト・アイデア／企画展／センター展示〉

<http://www.junji.org/>

渡邊淳司（科学技術振興機構「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」領域個人型研究[さきがけ] 研究員）、と田畑哲稔（RARC心理プロジェクト研究者、映像作家）、安藤英由樹（大阪大学情報科学研究科バイオ情報工学専攻准教授）による共作。

渡邊は人間の知覚メカニズムの研究やメディアアートの作品制作に携わり、人間の感覚と環境との関係性を理論と芸術的応用の両面から研究している。田畑はパフォーマンスグループcell/66b主宰として、身体表現とデジタル技術とネットワークを融合する試みを展開している。錯覚を利用したインターフェイスの研究と制作に携わる安藤が渡邊、田畑と組んだ本展の《Saccade-based Display》シリーズはアルスエレクトロニカ・センターに展示され、本展の最新作《blink to see___》では、縦1列に並べたLEDによるディスプレイを通して「サッカード」と呼ばれる高速の眼球運動を利用した色彩豊かな仮想の画像イメージが空間に提示される。

渡邊英徳〈ネットヴィジョン・現デジタルコミュニティ〉

<http://labo.wtnv.jp/2009/07/gps3600.html>

1974年大分県生まれ。東京理科大学理工学部建築学科・同大学院修了。2001年にゲーム制作会社フォトンを設立し、インターネット上の音楽コミュニティゲーム「リズムフォレスト」をリリース、インターネットを介してロボットが人間の動きを再現するコミュニケーションシステム「NEtROBOt Project」で、アルス2005ネットヴィジョン入賞。桜の写真を世界中からGoogleマップ上に投稿してもらう「桜前線さくらマッピング」、セカンドライフ内に収集されたACM SIGGRAPHのEmerging TechnologyやArt Galleryの記録写真を直感的に閲覧できるアーカイブ「SIGGRAPH Archive in Second Life」を手がけ、SIGGRAPH Asia2008「Synthesis」で発表。本展では、アルスエレクトロニカの歴史的な風景の記録や受賞作家のアーカイブがセカンドライフ上に展開される。

国立天文台4D2Uプロジェクト

<http://4d2u.nao.ac.jp/>

月周回衛星「かぐや（SELENE）」は、宇宙航空研究開発機構（JAXA）が打ち上げた月探査機である。この計画の主な目的は、月の起源と進化の解明のための科学データを取得することと、月周回軌道への投入や軌道姿勢制御技術の実証を行うことであった。本映像作品では「かぐや」が搭載していた14種類のミッション機器のうち、レーザ高度計（LALT）によって観測された高分解能の月面高度データを、3DCGでダイナミックに再現している。

JAXA宇宙ステーション（ISS）／「きぼう」文化・人文社会科学利用パイロットミッション

<http://iss.jaxa.jp/utiliz/epo/index.html>

JAXAでは、宇宙環境の追究や宇宙活動が文化/人文社会科学的にどのような意義を持つのか長い間議論を重ね、「きぼう」日本実験棟の打上げによって実験を試みる段階を迎えた。そこで、宇宙・微小重力といった環境での芸術

活動の検証を目的に文化/人文社会科学利用パイロットミッションを募集し、10テーマを選定した。これらのテーマはいずれも「宇宙」からの視点や「微小重力環境」を活かした芸術表現で、ISSの社会的価値の創造につながっている。今回、概要紹介される選定テーマと代表研究者は、以下の通りである。「水の球を用いた造形実験」藤原隆男（京都市立芸術大学教授）／「ISS宇宙飛行士の‘moon’ score」「光るニューロン」野村仁（京都市立芸術大学大学院教授）／「墨流し水球絵画」「Spiral Top」逢坂卓郎（筑波大学教授）／「飛天プロジェクト」石黒節子（お茶の水女子大学名誉教授）／「微小重力の身体と衣服設計に関する基礎実験—宇宙でのファッショナブルライフ—」宮永美知代（東京芸術大学助教）／「宇宙庭」松井紫朗（京都市立芸術大学准教授）／「宇宙モデリング」米林雄一（東京芸術大学教授）／「手に取る宇宙～message in a bottle～」松井紫朗（京都市立芸術大学准教授）

ほかPrix Ars Electronica+ [the next idea] 受賞者作品が展示・上映されます。

展覧会概要

タイトル：文化庁メディア芸術祭協賛事業「サイバーアーツジャパンーアルスエレクトロニカの30年」

主催：東京都現代美術館 共催：NHKエンタープライズ

支援：文化庁 後援：アルスエレクトロニカ・リンツ

企画協力：文化庁メディア芸術祭実行委員会・CG-ARTS協会 特別協力：オーストリア大使館・文化フォーラム

協力：文部科学省／科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業／宇宙航空研究開発機構 (JAXA)／EU・ジャパンフェスト日本委員会／関西テレビ放送株式会社／NECディスプレイソリューションズ株式会社／日本ヒューレット・パカード株式会社／NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]／国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト／3Dコンソーシアム／ソリッドレイ研究所/株式会社フォトクラフト社/ヤマハ株式会社/NVIDIA Japan/株式会社 フレームマン/STEREO D LLD・ほか

【会期】 2010年2月2日(火)－3月22日(月・振休) 休館日・月曜日(3月22日は開館)

【開館時間】 10:00-18:00(入場は閉館30分前まで)

【会場】 東京都現代美術館企画展示室地下2階・アトリウム

【観覧料】 一般1000(800)円、学生・65歳以上800(640)円、中高生500(400)円

* ()内は20名以上の団体料金。小学生以下、障害者手帳をお持ちの方と付添者2名、第3水曜日に観覧する65歳以上は無料／企画展のチケットでMOTコレクションもご覧いただけます。

*同時開催「MOTアニュアル2010：装飾」展との共通券＝一般1500円／学生・65歳以上1200円／中高生750円

【展覧会公式HP】

www.mot-art-museum.jp/exhibition/cyberarts

【関連プログラム】

*詳細は、当館ホームページに順次アップされますのでご参照ください。(ご参加の際は展覧会チケットをお求めください)

【同時開催】

「MOTアニュアル2010：装飾」2010年2月6日(土)－4月11日(日)

「MOTコレクション」2010年1月26日(火)－4月11日(日)

「東京文化発信プロジェクト 井上雄彦 エントランス・スペース・プロジェクト」2009年10月31日(土)－2010年3月28日(日)

【展覧会スタッフ】

担当学芸員(企画)：森山朋絵

副担当：村田康祐

広報担当：小原久実子、野口玲子

【東京都現代美術館】

住所：〒135-0022 東京都江東区三好4-1-1

Tel：03-5777-8600(ハローダイヤル)／03-5245-4111(代表)

当館HP：<http://www.mot-art-museum.jp>

交通案内：東京メトロ半蔵門線・清澄白河駅B2出口より徒歩9分

都営地下鉄大江戸線・清澄白河駅A3出口より徒歩13分

【広報 問い合わせ先】

東京都現代美術館 事業企画課企画係広報班 小原／野口

E-mail：小原 k-ohara@mot-art.jp／野口 r-noguchi@mot-art.jp

Tel: 03-5245-1134(広報直通)／Fax: 03-5245-1141

作家広報用画像

* 4,5,13,14,19,20,22,28,31,32,33,34,35,37,38,39,40,41以外は全て参考図版です。



1



2



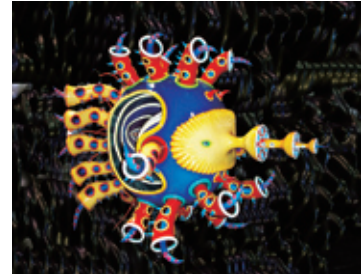
3



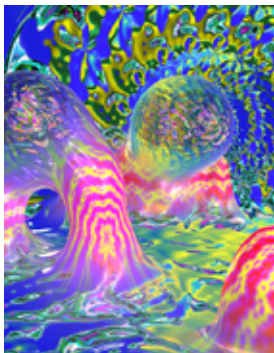
4



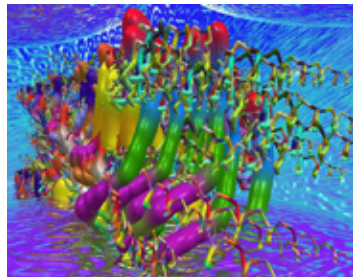
5



6



7



8



9



10



11



12



13



14



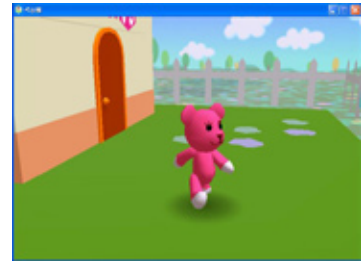
15



16



17



18



19



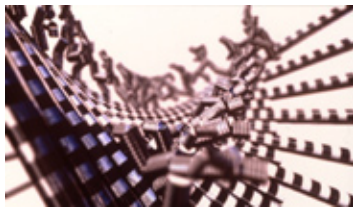
20



21



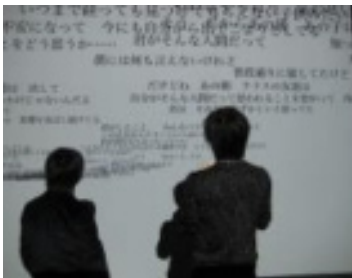
22



23



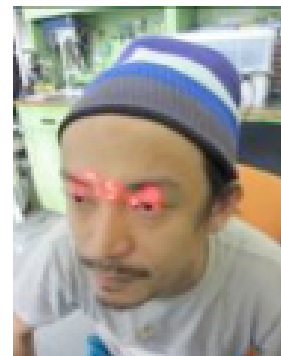
24



25



26



27



28



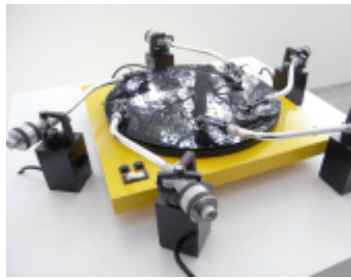
29



30



31



32



33



34



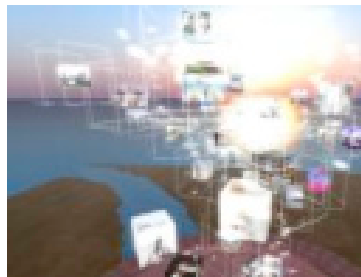
35



36



37



38



39



40



41



42

画像キャプション

- 1 h.o+株式会社電通「SLOGAN GENERATOR」©h.o+株式会社電通
- 2, 3 h.o+株式会社電通「BUZZ BUBLES」©h.o+株式会社電通
- 4, 5 クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョー「Life Writer」©2006, Laurent Mignonneau & Christa Sommerer
- 6 河口洋一郎「FICCO」©Yoichiro Kawaguchi
- 7 河口洋一郎「Flora」©Yoichiro Kawaguchi
- 8 河口洋一郎「Paradise」©Yoichiro Kawaguchi
- 9, 10 岩井俊雄「マシュマロスコープ」©Toshio Iwai
- 11 「アルスエレクトロニカ2001『Take Over』公式プログラム表紙」イラストレーション：金子ナンペイ
- 12 鈴木康広／東京大学「デジタルパブリックアートを創出する技術」プロジェクト「空気の港」より©鈴木康広 写真：森本美絵
* 科学技術振興機構の戦略的創造研究推進事業 (CREST)「デジタルメディア作品の制作を支援する基盤技術」研究領域 (平成16年-21年) によって実施されています。
- 13 岩田洋夫「Media Vehicle」©HIroo Iwata
- 14 岩田洋夫「Floating Eye」©HIroo Iwata
- 15 明和電機「スイッチト・オン・カップ」©Maywa Denki
- 16 明和電機「ツクバジオラマ」©Maywa Denki
- 17 八谷和彦「PostPet」©So-net Entertainment Corporation
- 18 八谷和彦「PostPet V3」©So-net Entertainment Corporation
- 19 クワクボリョウタ「P L X」©Ryota Kuwakubo
- 20 クワクボリョウタ「シ|フ|ン」©Ryota Kuwakubo
- 21 稲見昌彦「Surrounding of Firefly」©Masahiko Inami
- 22 児玉幸子「モルフオタワー」©Sachiko Kodama
- 23 森野和馬「Runners」©Kazuma Morino
- 24 森野和馬「ケンイシイ『Awakening』PV」©Kazuma Morino+Ken Ishii
- 25 平野啓一郎+中西泰人「記憶の告白 reflexive reading」©Keiichiro Hirano+Yashito Nakanishi
- 26 真鍋大度「Copy Visualize Instrument」©Daito Manabe
- 27 真鍋大度ポートレート©Daito Manabe
- 28 tEnt (田中浩也+久原真人)「call<->response」プロトタイプ ©tEnt (TANAKA Hiroya + CUHARA Macoto)
- 29 エキソニモ「ゴットは、存在する。」©exonemo
- 30 エキソニモ「The Road Movie」© exonemo
- 31, 32 スズキユウリ「Physical Value of Sound」photo: Clear Edition and Gallery
- 33 スズキユウリ「Physical Value of Sound」©Yuri Suzuki
- 34,35 野口靖+安藤英由樹「Watch Me!」©Yasushi Noguchi+Hideyuki Ando
- 36 渡邊淳司+田畑哲稔+安藤英由樹「blink to see_____」©Junji Watanabe+Tetsutoshi Tabata+Hideyuki Ando
- 37, 38 渡邊英徳「SIGGRPAH Asia Archive in Second Life」©Hidenori Watanave
- 39, 40 国立天文台4D2Uプロジェクト「月面全体の地形図」可視化：中山弘敬
LALTデータ提供・処理：宇宙航空研究開発機構 (JAXA),
国立天文台 RISE月探査プロジェクト 国立天文台4次元デジタル宇宙プロジェクト
- 41 中田裕士「You are in time」©Yuji Nakada
- 42 石井陽子+穂村弘「『火よ、さわれるの』」photo by Takumi Ota

サイバーアーツジャパンーアルスエレクトロニカの30年 写真貸出申込書

展覧展広報用として画像を13枚をご用意しております。ご希望の際は下記申込用紙に必要事項をご記入の上ファックス又はe-mailにてお申してください。なお、写真のご使用に際し、以下の点をご注意ください。

①キャプションは作品の下に作家名、作品名、制作年、撮影者等を必ず表記ください。

②作品写真のトリミング、文字のせをすることはできません。

※本展記事をご紹介いただく場合には、恐れ入りますが情報確認の為のゲラ刷り、掲載誌(紙)、DVD、ビデオ、URL等をお送りください。

雑誌名・番組名・サイト名

種別に○をつけてください TV ラジオ 雑誌 新聞 フリーペーパー ネット媒体 携帯サイト その他

発売・放送予定日

御社名

ご担当者名

E-mailアドレス

住所 〒

電話番号

ファックス番号

図版番号

ご希望の図版に✓をつけてください。

- | | | | |
|--------------------------------|--|---------------------------------|----------------------|
| <input type="checkbox"/> 1 | h.o+株式会社電通 | <input type="checkbox"/> 21 | 稲見昌彦 |
| <input type="checkbox"/> 2, 3 | h.o+株式会社電通 | <input type="checkbox"/> 22 | 児玉幸子 |
| <input type="checkbox"/> 4, 5 | クリスタ・ソムラー&ロラン・ミニョノー | <input type="checkbox"/> 23 | 森野和馬 |
| <input type="checkbox"/> 6 | 河口洋一郎 | <input type="checkbox"/> 24 | 森野和馬「ケンイシイ」 |
| <input type="checkbox"/> 7 | 河口洋一郎 | <input type="checkbox"/> 25 | 平野啓一郎+中西泰人 |
| <input type="checkbox"/> 8 | 河口洋一郎 | <input type="checkbox"/> 26 | 真鍋大度 |
| <input type="checkbox"/> 9, 10 | 岩井俊雄 | <input type="checkbox"/> 27 | 真鍋大度ポートレート |
| <input type="checkbox"/> 11 | アルスエレクトロニカ2001『Take Over』 | <input type="checkbox"/> 28 | tEnt (田中浩也+久原真人) |
| <input type="checkbox"/> 12 | 鈴木康広/東京大学 「デジタルパブリックアートを創出する技術」 プロジェクト「空気の港」より | <input type="checkbox"/> 29 | エキソニモ |
| <input type="checkbox"/> 13 | 岩田洋夫「Media Vehicle」 | <input type="checkbox"/> 30 | エキソニモ |
| <input type="checkbox"/> 14 | 岩田洋夫「Floating Eye」 | <input type="checkbox"/> 31, 32 | スズキユウリ |
| <input type="checkbox"/> 15 | 明和電機「明和電機のナンセンス楽器」 | <input type="checkbox"/> 33 | スズキユウリ |
| <input type="checkbox"/> 16 | 明和電機「ツクバジオリマ」 | <input type="checkbox"/> 34, 35 | 野口靖+安藤英由樹 |
| <input type="checkbox"/> 17 | 八谷和彦「PostPet」 | <input type="checkbox"/> 36 | 渡邊淳司+田畑哲稔+安藤英由樹 |
| <input type="checkbox"/> 18 | 八谷和彦「PostPet V3」 | <input type="checkbox"/> 37, 38 | 渡邊英徳 |
| <input type="checkbox"/> 19 | クワクボリョウタ「PLX」 | <input type="checkbox"/> 39, 40 | 国立天文台4D2Uプロジェクト |
| <input type="checkbox"/> 20 | クワクボリョウタ「シ フ ン」 | <input type="checkbox"/> 41 | 中田裕士 |
| | | <input type="checkbox"/> 42 | 石井陽子+穂村弘『「火よ、さわれるの」』 |

広報お問い合わせ先

TEL:03-5245-1134(直通) FAX: 03-5245-1141
東京都現代美術館 事業企画課企画係広報班 江東区三好4-1-1
野口 r-noguchi@mot-art.jp 小原 k-ohara@mot-art.jp